

令和2年度 県立水戸第一高等学校自己評価表

目指す学校像	〇授業を中心とした、意欲的で活気ある学習活動を展開する学校 〇生徒が、特別活動(学校行事、ホームルーム、生徒会活動)、部活動など多様な活動機会の中で切磋琢磨し、能動的な経験を蓄積しながらたくましく成長できる学校 〇生徒一人ひとりの進路希望実現に貢献できる学校		
昨年度の成果と課題	重点項目	重点目標	達成状況
<p>【成果】 令和元年度(2019年度)の重点項目に関する10の重点目標の達成状況は、Aが0、Bが7、Cが3であり、総括的には目標を達成できたといえる。Aが0というのは、前年度までの評価を見直し、ABCそれぞれの基準を当てはめた上での評価である。</p> <p>進学状況については、国公立大学の現役合格者数が162名を超え、過去20年で最多となった。過年度を加えた国公立大学・準大学合格者総数は247名で、昨年から43名の増加となった。難関大学(旧帝国大学、東工大、一橋大)については、前年度は72名のところ、67名合格と、若干の減少となった。東京大学は現役5名、既卒3名で、昨年同様8名にとどまった。また、国公立大学・準大学の医学部医学科合格者は、全国的に厳しい入試が続く中、現役11名、既卒9名の計20名で、昨年より11名の増と健闘した。</p> <p>特別活動については、部・同好会活動の加入率が90%を超え、9つの部が全国大会に出場している。さらにホームルーム活動、生徒会活動も生徒の自主的な運営のもと、活発に行われている。クラスマッチ・歩く会の学校行事は、天候や自然災害のため途中打ち切りや中止となってしまった。</p> <p>【課題】 令和2年度から医学コースの設置、令和3年度の中高一貫教育校の開設を控え、新たな校務分掌の見直しと、そのための情報収集及び情報の発信等広報活動に努めるとともに、教職員の働き方改革についても推進する。</p>	教育課程の工夫改善と学習指導の充実	①新学習指導要領の告示を踏まえ、単位制を活用した新しい教育課程の編成に向けて検討を進める。	B
	②電子黒板を活用するなどして、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B	
	③拡充した夏季課外を円滑に実施し、生徒の進路希望実現に資する学力の向上を図る。	C	
	④60分授業の効果を高めるために、さらなる授業の質の向上を目指して、授業に係る研修機会の確保・充実に努める。	B	
	進路意識の高揚と確かな学力の養成による進路希望の実現	⑤難関大学(旧7帝大+東工大+一橋大)や国公立大医学部医学科等への進路希望実現を支援し、現役進学率の向上及び既卒生を含めた国公立大学合格者数の増加に努める。	B
	⑥卒業生の協力を得るとともに、大学や病院と連携して高い志を持って医学部に進学し、将来医師として社会に貢献できる人材の育成に取り組む。	C	
	健康安全指導の充実	⑦健康安全に留意し、心身ともに健康で、生き生きとした学校生活を生徒が送れるよう指導する。 ⑧職員が健康で職務に従事できるよう業務精選に取り組み、評価面談で確認する。	B
	特別活動等の充実	⑨特別活動(学校行事、ホームルーム、生徒会活動)、部活動等の充実をはかり、創造性を養い、自主自立の精神の確立に努める。	C
	⑩学校行事を適切に配置し、時に臨機応変に対応することにより、各行事の円滑な実施と充実に努め、新たな伝統の創造を目指す。	C	
	将来を見据えた教育活動の拡充、特に医学コースの充実や中高一貫教育校に向けての準備	⑪社会の変化に対応し、本校から世界に羽ばたく人財、グローバルな視野を持って地域社会の発展に貢献する人財の育成のため、中高一貫教育や医学コースの情報の収集と発信を行いながら組織の拡充に努める。	B

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題	
国語	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	B 大学入試問題の過去問等を適宜授業に取り入れることや、模試の際の意識付けをすることなどを通じて進路意識の高揚をはかった。 電子黒板の活用により、板書時間を短縮することで60分授業の効果を高めることができた。次年度は、ICT機器の特性を十分に理解した上で、効果的に授業で活用するための方法について探究を進めていきたい。 今年度は県や出版社など様々なオンラインの研修にそれぞれ参加し、授業改善について考えることができた。校内でも研修を実施し、情報交換に努めた
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進捗や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○電子黒板の活用を推し進めて、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B	
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	
		国語の学習に対する意欲・関心を高める。	○授業方法を工夫改善し、教員相互に授業を公開するなど、随時教科内における研修等を行い、指導方法に対する研究を深めていく。 ○指導内容・方法・進捗について、各学年の担当者間での打合せを綿密に行う。	B	B 各学年で授業の打ち合わせをしっかりと行い、コロナウイルス関連の休校の際には共通する内容は動画を配信するなどして授業を進めることができた。今後は指導内容について3年間を通じて育成する生徒像を明確にし、さらに一貫性のある指導を行っていきたい。 古典の学習を中心として授業毎に小テストなどを実施し、生徒の理解度をはかる機会を設けることができた。また、3年生を中心に各担当者毎に添削指導を丁寧に行い難関大入試に向けて準備を進めることができた。定期考査については今年度から実施された共通テストの動向や新学習指導要領の内容もふまえた設問の工夫をさらに進めることができるよう、教科内での問題研究をしっかりと進めていきたい。 今年度はコロナウイルスの関係で読書感想文の提出については生徒の自主性にゆだねた形となったが、休校期間中に読書案内を強化するなどして読書意欲の喚起に努めることができた。課題については生徒自らが自主的に取り組むことができるよう提出期限ではなく取り組む目安時期を設定するなどした。今後も他教科と連携しながら適切な課題のあり方について模索していきたい。
		基礎学力の定着を図り、段階的に難関大学入学試験に対応できる学力の養成を図る。	○小テスト等によって基礎学力の定着を図る。 ○適宜添削指導を実施し、難関大学入試に対応可能な文章読解力と表現力の養成を図る。 ○副教材等を利用し、学習内容の活用を図る。 ○定期考査について基本から発展までの設問構成を工夫し、平均点50～60点台の問題を考案する。	A	
		自立的な学習を促し、豊かな言語能力を持った生徒を育成する。	○課題等を生徒の実態に即して適宜与え、生徒が自主的に学ぶ姿勢を育み、段階的に自立的学習に移行できるよう促す。 ○読書意欲を喚起し、読書感想文コンクールへの取り組みを奨励する。	B	
地歴公民	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	A 大学の学問内容(歴史学、地理学、政治学、経済学等)との関連を意識した授業を展開することができた。新課程における授業展開が今後の課題である。 一斉休校に対応しながら授業内容の再編成や電子黒板の活用を継続して行うことができた。新課程における授業内容の編成、電子黒板のさらなる利用方法が今後の課題である。 科目担当者間での情報共有と授業改善に努めた。教科・科目に限らず校内授業公開等を活用し相互の授業方法を研究し、さらなる指導力の向上に努めた。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進捗や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○電子黒板の活用を推し進めて、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A	
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	
		綿密な教材研究や授業改善を進めることで、進路実現のために必要な確かな学力を養成する。	○専門性に裏打ちされた授業を展開し、生徒の知的好奇心を喚起させる。 ○基礎・基本を徹底させるとともに、基礎的な知識を生かして自ら思考する能力や、課題に取り組んでいく姿勢を身につけさせる。 ○国公立大個別試験、難関私立大学試験、共通テストの分析を綿密に行い、授業の内容や定期考査、実力試験の作問等へ反映させることにより生徒の学力を向上させる。	A	
	教科研修を充実させることで、教員の授業力の向上につなげ、教育改革や中高一貫教育への対応を図る。	○指導力の涵養を視野に入れ、高い見識の修得を目指した教科研修を積極的に実施する。受験指導では個別の入試に的確に対応できる体制の構築を図る。 ○科目担当者間での授業の進捗、指導方法など綿密な打合せを行い、課題意識を共有し、指導を充実させる。 ○電子黒板などのICT機器やGoogle Classroom、Classiなどのソフトウェアの活用をすすめて実践事例を蓄積し、ノウハウの共有化を図る。 ○新課程・中高一貫教育に対応するための内容精選や指導計画の見直しなど、地歴公民科の将来像についての話し合いを継続する。	A A	<p>A</p> <p>新型コロナウイルスの感染拡大に伴う休校への対応やその後の指導において、教科内で様々な情報共有を行いながら、指導力の向上に努めることができた。特に休校期間中には、ClassiやGoogle Classroomの使い方を共有する等の研修が行われた。今後も科目担当者間で入試問題の研究や授業見学を実施し、情報の共有・指導方法の向上を図っていきたい。</p>	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
数学	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	授業や課題で扱う内容に発展的事項を取り入れ、生徒が興味・関心をもって主体的に取り組めるよう工夫した。継続して指導方法の研究に努めていく。 生徒の理解度合いの把握に努めながら、授業進度や指導内容を検討した。特に休校期間中には、Google Classroomを活用し、延べ111本の授業動画を配信することができた。次年度は更に検討を重ね、より教育効果の高い学習指導の充実に努めていく。 教科内での授業参観を積極的に実施し、指導方法の研究に努めた。次年度は附属中学校担当教諭を交えて更に教科内で情報を共有し、継続して研究をしていく。
		○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○電子黒板の活用を推し進めて、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A	
		○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	A	
	授業に積極的に取り組ませるとともに、自主的に数学に取り組む態度を育成する。	○予習復習を励行させるとともに、課題等の提出を習慣化させる。 ○学年担当者間の連携を密にし、教材の精選と授業内容の充実に努めるとともに、多様な見方・考え方を例示するなどして、数学に対する生徒の興味・関心を高める。 ○電子黒板などICT機器の実践事例やノウハウを蓄積し、職員間で共有し実践することで生徒の授業理解の深化を図る。	B	
進路実現のための学力向上を図る。	○考査・試験の問題は精選検討を重ねるとともに、結果についても分析を行い、継続的な指導に活かす。 ○大学入試問題等を日頃から研究し、積極的に授業に取り入れ、大学個別入試および新テストに対応できる力をつけさせる。 ○大学入試問題分析会(東京大・京大・東北大)を実施し、入試問題研究や教材研究により教員のレベルアップを図る。	A		
理科	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	昨年度に続き、主体的に取り組みめるような指導法・教材等を工夫し、授業の中での活動を重視してきた。次年度も、さらなる工夫を進める必要がある。 電子黒板の利活用により、60分授業の効果を高めることができた。次年度は、タブレット導入にあたり、より高い学習効果を得るための教材作成および精選を図る。 今年度は校外の研修会に参加できなかった。次年度は、校内における教科の研修会を行い、さらなる指導技術の向上に努めたい。
		○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○電子黒板の活用を推し進めて、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B	
		○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	
	知的好奇心を育て、科学的な思考力・判断力・表現力が身につくよう、教員の授業力の向上を図り、授業展開を工夫する。	○自然科学の様々な事象現象を、生徒が実際に見る・触れることで、それらについて考察し、科学的な思考力・判断力・表現力を身に付け、深められるように演示・生徒実験を多く取り入れる。 ○科学的な思考力・判断力・表現力を身に付けられるように、過程が確認できる形式のレポート作成を指導する。 ○最先端の科学技術について、授業内で適宜話題に出し、生徒に興味・関心を持たせられるようにする。	A	
	確かな学力の定着を図ると共に、生徒それぞれの進路希望に応じた学力試験に対応できる学力の養成を図る。	○基本的な原理・法則の理解を深め、さらに問題演習を重ねることで学力の定着を図るために演習量を確保する。また、校内試験ごとに解答の見直しをさせ、基礎学力および応用力の向上を図る。 ○国公立大学個別試験、難関私立大学試験の分析、また、大学入学共通テストに対応できるよう担当教員間での報告・連絡・相談を密に行い、授業や定期考査等に反映させることで学力の向上を図る。	B	
	新学習指導要領や大学入学共通テストに向け、研修の確保・充実に努め、教員の授業力向上・これからの時代に求められる教育のよりよい在り方に対する意識の向上を図る。	○新学習指導要領・大学入学共通テストに対応するための学習指導の在り方や校内模試の在り方など、これから本校の理科教育の在り方について検討を進めていく。 ○主体的な学びや対話的な学びの過程で、ICTを効果的に活用する。 ○ICTの活用などに際しては、教員間でのノウハウの共有化を図るなど研修の機会を設け、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B	
各教科指導全般	○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題			
保健体育	各科共通	教科指導全般		B	生徒の主体的で深い学びにつなげるために各授業を通じて、生徒が教え合うこと学び合うことを促進したい。進路実現に向けて体力面からもアプローチしたい。		
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○電子黒板の活用を推し進めて、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。			A	ICT活用については、電子黒板での授業は概ね定着してきたため、今後は情報端末(タブレット)を有効活用した授業展開を推進していきたい。とくに実技種目での活用を検討していきたい。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。			B	研修会への参加や教科会を通じて授業方法の改善を図り、生徒の主体的活動の契機としたい。
	歩く会の高い完歩率を維持させる。	○集団行動における規律と態度を学ばせ、有意義な学校生活を送らせる。 ○体力の向上のために計画的な授業を構築し、完歩への意欲を喚起する。	A	新型コロナウイルス感染症の対策を踏まえた歩く会を引き続き検討していきたい。また、生徒の健康・体力面への配慮を念頭に置きながらも、本校の伝統行事「歩く会」の意義について理解させるように指導していきたい。			
	体力テストの底上げを図る。	○本校生は筋力全般が弱いので、体育授業で毎時補強運動を実践する。 ○長距離走への積極的な取り組みにより、基礎体力の向上を図る。 ○本校性の弱い部分(投力)の強化向上を図る。 ○特別活動の体育分野における積極的活動を推進する。	B	新型コロナウイルス感染症での臨時休校の影響で生徒の基礎体力の保持増進に課題を残した。体育授業を通じての体力向上はもとより、生徒全体に対して授業以外においても年間を通じて体力増進の意識付けを図りたい。			
授業時のケガの防止に努める。	○運動の基本動作において、基本となる正しい動き方を身に付けることがスキルの向上のみならずケガの防止に繋がることを理解させる。 ○用具器具の使用について安全第一を心がけ指導する。 ○授業に臨むに当たり、健康観察、熱中症対策、交通安全に努めると同時に、生徒にも健康安全に対する自意識の向上を喚起する。	B	A	新型コロナウイルス禍の中での感染防止対策を引き続き考慮して指導していきたい。臨時休校や感染拡大防止の観点から、今年度は例年以上に活動量が減少しているため、通常通りの授業が展開させる際は、事故や怪我の発生について十分注意を払い授業展開をする必要性を感じている。			
「保健」とおとして心身の健康の保持増進を図る。	○「保健」を通じて、思春期における生徒の健全な成長を促し、地球環境における自らの役割を理解させる。 ○「保健」の授業を通し、思春期における自身の健康課題と社会的な課題における自身の役割を理解させる。	A		昨年同様に「保健」の授業では、各自の健康課題を理解させ、生活実践に生かせる指導を行いたい。また、各種健康課題について、グローバルな視点に立ちながら指導していきたい。あわせてICT活用を推進した授業づくりに努めていきたい。			
芸術	各科共通	教科指導全般		B	基礎的な内容を重視しながらさらに芸術の本質を幅広く深く理解追求する姿勢を意識させ、進路意識もより高まるよう指導を進めた。次年度も継続して行いたい。		
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○電子黒板の活用を推し進めて、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B	B	新型コロナウイルス感染拡大の影響により授業の内容が一部制限されたが、各単元ごとの目標を明確にし計画的に展開すること、かつ、その目標設定を生徒の意欲がより上がるラインに細やかに設定することで、生徒の主体的な取り組みの維持に努めた。ICT機器を活用した授業展開をするのと同時に、個別の指導も丁寧に行うことができた。	
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、校外での各種研究会等は中止になったものも多かった。音美書とも研修・研究を重ね、充実した授業をめざす。		
	鑑賞の機会を確保するよう努める。感性を高め、人生を豊かにするという意識・態度を育てる。	○校外学習等や校内での鑑賞会を実施して、より多くの作品に接する機会を増やし、本物だけが持つ魅力を体感させ、豊かな感受性と人間性を身につけさせる。 ○様々な作風・ジャンルの作品を取り上げ鑑賞させる事により芸術に対する視野を広めさせるとともに、ものを見つめる目を養い、そこから真実を発見しようとする態度を身につけさせる。	C		新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、校外での鑑賞学習は実施できなかった。校内の授業において様々な作風・ジャンルの作品を取り上げ鑑賞させる事により芸術に対する視野を広めさせることに努めた。次年度も状況に応じて鑑賞活動の充実を図る必要がある。		
	自発的に、課題に取り組む姿勢を持たせる。	○実技・実習の時間をできるだけ確保するとともに、その内容を精選し、工夫して実践できるようにする。基礎から応用までバランスの取れた授業内容を目指す。 ○アクティブ・ラーニングを意識した能動的な学習を取り入れ、より活性化した授業展開を目指す。 ○自分の表現を発表する機会を増やし、その表現を生徒同士で共有し理解し合う場面を多く設ける。	B	B	新型コロナウイルス感染拡大の影響により、休校期間分の実技活動時間を減じざるを得なかったり、年間を通して授業の内容が一部制限されたりしたが、その中でも生徒は積極的に実技・実習に取り組み、内容の充実した作品・演奏を完成させようという姿勢を身に付けることができた。授業時間ばかりでなく、朝、昼休み、放課後等に自主的に取り組む生徒もいるなど、高い意識で主体的に取り組む姿勢が見られた。作品をつくりあげる過程での意見交換の場面も効果的に取り入れられた。次年度も、本校生に適する基礎から応用までバランスの取れた授業内容を目指したい。		
新たな教材研究に努める。	○新しい展開を生むための教材研究に努めるとともに、教師自身が技術向上の研鑽を積み、高いレベルでの指導ができるよう努める。	B		幅広い作品についての指導をするため、専門分野や芸術全体に対する視野を広める活動をところどころがけた。芸術に関してさらに研鑽を積み、生涯にわたり芸術を愛好する人間の模範を生徒に示したい。			

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	生徒の興味関心が高まるような教材を精選し、それらを使った活動を取り入れ、生徒が主体的に取り組めるよう工夫した。今後も、明確な目標を持って、知識・技能を主体的に高めることができるような授業、課題の内容について研究していきたい。
	充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○電子黒板の活用を推し進めて、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A	○各科目担当者間で教材作成や指導方法について綿密に話し合い、試行錯誤を繰り返しながら改善をして進めることができた。次年度も、複数の科目間で学習内容がより効果的に再学習できるような工夫をするなど授業内容の充実に努めたい。 ○各担当者が教材に合わせた電子黒板の利用を試み、それを科内で共有することで利用方法の幅が広がった。次年度は、既存の電子黒板に加え、新しく導入されるモニターとタブレットを活用し、より効果的な指導法を探っていきたい。
		○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	校内外の授業見学や教材の共有、研修会の利用を通して、各自が指導力向上に努めた。特に、今年はGoogle Classroomなどオンラインでの学習媒体を利用する方法を研修し、学習活動の幅を広げることができた。次年度も、対面授業、オンラインを利用した学習、家庭での課題学習のバランスを工夫するなど、60分の授業をより効果的にするために改善を図っていきたい。
外国語	1年 英語を読み、書き、聞き、話す活動とその適切な評価を通して、実践的コミュニケーション能力の基礎となる4技能の基本運用力を育成する。	○コミュニケーション英語Ⅰでは、理解と表現のバランスのとれた指導を行い、英文を正しく理解し、コミュニケーションをとるための基本知識と技能を養成する。 ○英語表現Ⅰでは、技能統合型の言語活動を取り入れ、英語で適切に自己表現するための基本知識と技能を養成する。 ○授業での指導内容と関連させながら、サイドルーダーなどの課題学習を効果的に活用し、自ら英語を学ぶ力を涵養し、正確な英文理解力および表現力を養成する。 ○テスト問題の改良や適切なパフォーマンス評価を実施して生徒の英語力を正確に測るとともに、更なる学習の動機付けに資するような評価の在り方を考える。	B	○コミュニケーション英語Ⅰでは、英問英答を通した本文の内容理解、文法・構文を理解した上での正確な読み取り、リライトやリテリング、ディスカッションなどを通じたアウトプットという授業の流れの中で、基本知識と技能の養成を図った。レッスンごとに、題材に関連した入試長文に触れることで、理解を深め知識の定着を目指した。またALTとのチームティーチングでも教科書の内容に関して、ペアワークやグループワークなどの言語活動を行い、英語による発信力の養成に努めた。スピーチやプレゼンテーションなどのパフォーマンステスト等も取り入れ、自分の考えを英語で表現する力と態度の涵養を図った。 ○英語表現Ⅰでは、レッスンごとに、学習した文法事項を用いた和文英訳、60～100語程度のエッセイライティングを実施し、表現力の育成を図った。また外国人教諭との授業においては、言語活動を中心にディスカッションの基礎を学ぶなど、実践的なコミュニケーション力を養成した。 ○定期的に配布する課題学習計画表に基づいて、読解問題集やサイドルーダー等の多読を実施した。課題については、チェックテストやレビューテストを実施し、理解の定着を図った。Google Classroom やClassi を通じて、予習や復習課題、授業で扱った長文の音源等を配信した。 ○次年度は、今年度に習得した基本的な英語4技能の力をベースに、正確な英文理解力と表現力を中心に、実践的な英語コミュニケーション力の育成を目指したい。
	2年 英語4技能を使った活動を効果的にを行い、正確な英文理解力と表現力を中心に、実践的な英語コミュニケーション力の基礎を養成する。	○コミュニケーション英語Ⅱ:教科書の比較的平易な英文により、基礎的な読解力(語彙・文法・語法・構文に触れながら)の伸長を図るとともに、content basedの活動を通じて英語の運用力、批判的思考力等を育む。 ○英語表現ⅡA:やや難度の高い入試英文を通じて、発展的な読解力(段落展開・論理展開)の伸長を図る。1年次の基礎的知識を定着させ、自立した学習者を育てる。 ○英語表現ⅡB:教科書の比較的平易な表現を用いて、発展的(入試問題に対応)かつ実践的(外部検定等に対応)な表現力を育む。ネイティブ・スピーカーが単独で授業を行う。 ○課題書籍:小説に加えて、普遍性の高い文学作品を採用し、教養教育の一助とする。 ○考查問題:授業との有機的な結びつきを重視する。解答解説の一層の充実により、生徒が納得的に復習できるようにする。 ○Recitation Project等のパフォーマンス・テストを通じて、生徒の実際的な英語運用力、コミュニケーション力の伸長を図る。	B	○「C英Ⅱ」では、検定教科書(教科書「C英Ⅲ」)の早期採用を含む)の学習により、既習事項(語彙・文法・語法・構文等)の確認と定着を図り、読解力の全般的基礎力を養成した。また、内容の普遍性や抽象度の高い英文を採用し、批判的な視点の養成を図った。○「英表ⅡA」では、難度の比較的高い英文(国公立二次レベル)を用い、読解力の深度(主として精読力)養成を図った。「英表ⅡB(外国人教員)」では、段落構成や論理構成を意識した英作文の指導を行い、より実践的で高度な英作文力を養成した。○英検2級及び上位級ー共通テスト(英語)との親和性が高いーの取得を促した。入学当初の目標には達していないが、計122名(12月時点)が取得している。○課題書籍については、予定されていた内容(年間5冊)を実施した。質問会を設け、生徒の取り組みを促す工夫を行ったが、特に年度後半において取り組みに差が見られた。○考查作問については、生徒の復習を重視し、特に解答解説の充実に努めた。○パフォーマンス・テストは、休校措置により全体の進度が圧迫され、必要十分な形態での実施が出来なかった。○英語科通信(不定期・10部程度)を発行し、英語学習への更なる動機付けを図った。○次年度に向けて:1.学習計画を明示的に示す。2.個人差(教科の理解度及び多様な進路選択)に対応するための個別指導の充実を図る。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
外国語	3年 英語4技能の習熟に努めながら、より発展的な理解力および表現力を育成する。	○英語表現Ⅱでは、1・2年次に培った文法力を土台とした、より正確に作文する技能を指導する。さらに、読んだり聞いたりした事柄について、自分の意見を論理的に表現する力を養う。 ○リーディング演習では、まとまった文章に対する正確で論理的な読解力や、要約力を高める。 ○英語表現Ⅱおよびリーディング演習の授業をとおして、大学入試にも対応できる総合的な英語力を養成する。 ○夏季課外や個別の添削指導などにより、個々に応じた指導に努める。	A	全体としては、休校期間中とその後の指導により、基礎を基本とした応用力の養成を図ることができた。精読力や単文作文力の重要性は次年度以降の指導にも活かせる観点だと感じた。英語表現Ⅱでは、ALTの協力による英作文添削、また、リスニングや文法語法の指導により、表現力などのコミュニケーション能力を育成することができた。特に3年次におけるALTの活用は、生徒および教員にとって非常に有意義な要素となることがわかった。リーディング演習では、できるだけ多くの英文に触れさせるなかで、精読や段落読みなどが読解力や要約力向上の一助となった。しかし、対象生徒全体を考えた難易度や分量の調整が一つの課題として残った。
	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	将来自立した生活が送れるように基礎、基本的な知識や技術を確実に習得させたい。実態に合った実習や実験をしていきたいが、今年度のように実習が難しい分野についての対応も継続的に模索していきたい。
家庭	充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○電子黒板の活用を推し進めて、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業の定着を図り、指導方法等の研究を進めるため授業に係る研修を実施する。	B B B	B B B
	基礎・基本の内容を体験を通して理解させ、問題を見つけ、よりよい生活に変えていこうとする態度と生きる力を育てる。	○実験・実習内容を工夫と精選をし、知識と体験の定着を図る。 ○各分野における変化や問題を自分事として捉えられるように、高校卒業後の自分の人生に反映していこうとする態度が身につく授業の展開を図り、自ら学び自ら考える力を育てる。	B	B
	各分野の関連性・重要性を見だし、日常生活と比較させることで、主体的・総合的に生きようとする意識・態度を育てる。	○夏休みに各家庭で実施するホームプロジェクトでは、4月からの授業の中で全員が計画的に進めていけるように支援し、日常生活の中の問題点・改善点を認識させ、生活の質の向上に結びつくように工夫する。	B	B
	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B
情報	教科指導全般	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○電子黒板の活用を推し進めて、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B B B	B B B
	学習活動を通じて、情報モラルに対する知識・理解を深め、適切に行動できるようにする。	○動画視聴や事例検証等を通して当事者意識を持たせ、情報モラルの着実な定着を図る。	B	B
	各種ソフトウェアを活用してプレゼンテーション等における表現能力の向上を図る。	○全員が各自のテーマに基づいてプレゼンテーションをおこない、それに対して改善点等を話し合うなどより内容を深める活動をおこなう。	B	B
	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
教務	授業時間を確保する。	○自習をできるだけ避けるため、早めに出張・年休を把握し、可能な限り授業交換をする。その際、交換による授業のアンバランスにも配慮する。さらに、授業の曜日変更により、定期考査間の授業時数の均一化をはかる。また、昨年度より拡充した夏季課外を円滑に実施する。	B	<p>曜日変更により定期考査間の授業時数はほぼ均等にすることができ、また出張・年休による授業もほぼ完全に振り替えることができた。しかし新型コロナウイルス感染症に係わる休校や分散登校によって崩れた授業時数のバランスを取るために、特に後期は曜日変更等が多くなり、一部混乱が生じてしまうこともあった。</p> <p>新型コロナウイルス感染症に係わる授業のオンライン化への対応で、Google Classroomやクラッシーなどを導入してICT化を一気に進めることができた。また研究構想部との連携のもと、教員相互による授業研究などを通してさらに質の高い授業を展開することができた。今後は今年度末に導入されるWIFIを利用した授業展開の研修と研鑽を進め、授業の質のさらなる向上に向けた取り組みを進めたい。</p> <p>新学習指導要領の告示や大学入試制度の変更を見据え、本校に適した教育課程についての検討を進めることができた。また令和4年度からの新教育課程の編成を終了することができた。共通テストの試験科目も概要が見え始めたので、来年度は教育課程の一部変更が必要かどうかを検討したい。</p> <p>新型コロナウイルス感染症に係わり、各説明会や学校公開は中止や規模縮小などの対応となったが、その代わり動画配信などweb上での広報活動も行った。次年度は併設型中学校の開設に伴い、小学生対象と中学生対象のそれぞれの説明会の日程や内容について、改めて見直した上で実施したい。</p> <p>情報部など多くの関係部署の協力によって、支援システムから県の統合システムへの移行は、懸念された混乱もなく移行することができた。その後は担当者の尽力により順調に運用され、先生方の負担軽減につながっている。</p>
	授業内容のさらなる充実を図る。	○60分6時間授業をより充実したものとするため、研究構想部と協力して、教員相互による授業研究などを実施する。また、電子黒板だけでなく、さまざまな機器を利用したICT教育を推し進めて、より教育効果の高い学習指導の充実を努める。	A	
	令和2年度以降の教育課程の検討をする。	○新学習指導要領の告示を踏まえ、単位制を活用した、より教育効果の高いカリキュラムの構築を目指すとともに、大学入試制度の変更を見据えた検討を進める。また医学コースの設置や中高一貫教育校に向けて各教科・分掌と連絡を取りながら教育課程を検討する。	B	
	教育活動を公表する。	○学校説明会委員会や研究構想部と連携して、中学生対象の水戸一高説明会、学習塾対象説明会の実施により学校を公開する。また、同時に地域住民等に広く水戸一高の教育理念を周知する。特に学習塾説明会については、学校公開日とあわせての実施を試みる。	B	
	単位制支援システムから統合システムの移行をスムーズに行う。	○本年度後期より、支援システムが現行のものから県の統合システムへと移行するが、データの移行やシステムの運用など、予想されるさまざまな課題を適切に解決してスムーズな移行に努める。	A	
特別活動	学校行事を通じて、本校生としての一体感と誇りを持たせ、学校生活を充実させる。	○各委員会生徒と密接な連携を図り、明確な活動計画の基で各行事の運営を行う。 ○天候やその他の理由により計画通りにいかない場合に、適切な判断ができるよう、あらゆる事態を想定しリスクに備えるとともに、柔軟な生徒へのケアをおこなえるよう準備しておく。 ○積極的な生徒会活動への参加を促し、主体的な運営ができるよう指導する。 ○学習活動や他の諸活動とのバランスをとり、学校行事の充実度85%以上を目指す。	C	<p>○新型コロナウイルス感染症の影響により、休校措置、分散登校措置があり、夏までに計画されていた学校行事が、ほぼ中止となったことで、目標としていた「学校生活を充実させる」具体的な方策がとれなかった。次年度の課題としては、いかに制限がある中で工夫し、新しい学校行事の在り方を作り出していくかが、大きな課題である。新しい生活様式の中で、伝統と前例にとらわれない新しい発想を生み出さなければならない。</p> <p>○学校行事同様、感染対策を講じながらの活動で、対外試合等の制限があるなかで、いかにモチベーションを高く持ち続けることができるかが今後の課題である。 ○中学生の受け入れ態勢を整える ○各団体の設備、備品、部室の管理を徹底させる指導の充実を図る。</p> <p>○各学年で定着を図るために、書式の改善等、担任および生徒が利用しやすい形式を調べていく。</p>
	部活動を通じて、豊かな感性と健全な心身を育む。	○部活動と学習活動を両立している生徒の割合、80%以上を目指す。 ○各部活動で、活動方針、目標、活動計画を策定し、活動の充実・成績の向上を目指す。 ○各団体の設備、備品の管理を徹底させる。	B	
	HRにおいてキャリア・パスポートを活用する	○各学年のHRにおいてキャリア・パスポートを作成し、社会の中での自身の在り方を考える。	B	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
進路指導	<p>生徒一人ひとりに高い進路目標を設定させ、一人でも多くの生徒がその進路希望を実現できるよう支援し、同年度の卒業生に関して、現役時と卒業後の合格者合計で、難関大学(旧7帝大+東工大+一橋大):80名、医学部医学科:25名、国公立大:220名を目指す。</p>	<p>○1・2学年と連携し、生徒の進路意識の高揚を図るとともに、授業を中心とした主体的かつ計画的な学習を促進させる。 ○生徒が大学のオープンキャンパスに明確な目的意識のもとで積極的に参加し、得たい情報を自らすすんで獲得しその活用がはかれるよう、学年との連携のもとで事前・事後の指導を強化するなど、その指導の在り方の工夫に努める。 ○東大を含めた難関大の研究を通じて、「難関大研究会」の機能をさらに強化し、進路希望の実現に結びつける。 ○新テストに向けて、学年や教科と連携し、定期考査等での出題の工夫や、新テスト型の模擬試験の受験をはじめ、新傾向の問題へ十全な対応を図っていく。 ○医学コース関連のプログラムを円滑に実施し、キャリア教育と学力増進の両面で医学科を志望する生徒への一層の指導の充実を図る。</p>	B	<p>○進路意識の高揚については、1・2学年団による積極的な生徒への働きかけが年間を通じて計画的に実施され、十分にその目標を達成できた。また、オープンキャンパスについては、コロナウイルス感染症の影響で従来の形では実施されなかったが、1・2学年を中心に丁寧な指導のもとで、WEBオープンキャンパスの視聴や、インターネット等を使った「大学調べ」などが生徒個々に進められた。むしろ自身が能動的に調べることで、結果的に所謂難関大の良いところが明確に認識され、高い目標に向けてモチベーションが高まった生徒も多かったように思う。次年度についてもコロナの影響が残ると思われる中で、より効果的な指導の在り方を工夫していく必要がある。 ○進路からは予備校等から集めた難関大に関する各種の分析データを学年に提供し、学年では生徒の状況と照らしながら東大研究会を中心とする難関大研究会が、各学年各々の問題意識を反映した形で、新たな取り組みも交えて効果的に実施された。 ○新テスト(大学入学共通テスト)については、教科において対応が進んでいる。また、2学年において共通テスト型の模擬試験(希望者)を実施した。初めての実施となる今年度の問題を入念に分析し、今後も個別試験への対応との兼ね合いも考えながら、しっかりと調整を図っていく必要がある。 ○医学コースの事業については、コロナウイルス感染症の影響が大変大きく、中止に追い込まれる行事等も出る中で、オンラインでの実施に切り替えるなど、出来得る限りの指導を医学部医学科志望者に向けて行うことができた。次年度も同様の制約を受ける可能性が残るが、その中でより有効な指導を工夫していきたい。 ○数値目標の達成度については、3月の結果を待つ。</p>
	<p>学年との連携を図り、生徒や保護者に、機を捉えて適切な進路情報を提供する。</p>	<p>○学年と連携し、進路講演会やガイダンスを通して、情報提供と生徒の啓発に努める。保護者に対しては、保護者対象の進路講演会や医学部進路講演会等も実施し進路情報の提供に努める。 ○「進路通信」を発行し、生徒に情報提供するとともに、進路意識の高揚を図る。</p>	B	<p>○学年との連携のもとで生徒対象の進路講演会を、それぞれ目的に応じて実施した。1、2学年については別個に保護者対象の進路講演会も実施し、沢山の保護者のご参加を頂いたが、入試改革を目前に控えて最新の情報なども提供することができた。 ○今年度は1・2年生の医学部志望生徒の保護者を対象として、新たに「保護者向け医学部講演会」も実施し、医学部入試の現状や医学部の実態等についてもお伝えすることができた。</p>
	<p>生徒のデータを、3年間通して見渡せるような進路情報システムを確立し、それらの情報・データを職員間で共有できる環境を整備し、さらに、指導技術の向上に努め、一層の進路指導の充実を図る。</p>	<p>○3年間の学習成績と最終的な大学の可否がリンクした形でのデータベースについて、今年度も新たにデータの更新を行い、その活用モデルとしての「佐々木システム」に関して職員研修等を実施し、進路指導における有効活用をはかる。 ○現役生はもちろん浪人生も含めて、進路確定まで継続的な指導を目指す。</p>	B	<p>○第3回校内模試や1・2年次の実力テストの成績と、現役時及び浪人生時の大学の可否が、大学、学部、学科別等で検索できるシステムが昨年度完成し、今年度はその活用を進めることができた。今後もデータを追加・更新することで、利用しやすさと信頼度を高めていきたい。また、有効な利用に向けて、活用時のポイント等に関する職員へのアナウンスを今後も続けていく。さらに、今後は進路資料にもこのデータをもとに、各大学の分析データを追加し、生徒が直接利用できる形を模索していきたい。 ○旧3学年による浪人生への激励会が年2回実施され、また、個別の相談にもしっかりと対応することはできた。</p>

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
研究構想	「チャレンジプロジェクト」(プロジェクト「図南2」-21世紀型スキルを備えたリーダーの育成-)を充実させる。	○「心に火をつけるフォーラム」,「社会人インタビュー」,「校風の理解(講演会)」,「大学模擬講義(5教科主催)」等の行事を通して、自分の在り方や生き方、進路について考えさせる。 ○課題研究や「知道プロジェクト発表会」を通して自ら課題を発見し、多様な視点から論理的に考察する力や自らの考えを他者に上手に伝える力を培う。	A	○「チャレンジプロジェクト」事業による様々な行事を通して、生徒の学ぶ意欲を喚起し、将来の自分について考えさせることができた。一方、行事が過密になり過ぎた面もあり、次年度は実施方法や実施時期について工夫する必要がある。 ○「課題研究」では、「クラスでの発表会」、代表による「知道プロジェクト発表会」を実施し、プレゼン力が向上した。今年度新たに筑波大学の協力を得て「研究論文の書き方」の指導を受けた。
	教員の授業力向上を図る。	○「新任者授業見学会」,「校内授業公開」による校内での実践研修および、「筑波大学附属高校等の教育研究大会」,「駿台教育研究所の教育研究セミナー」等による校外での指導法研修を行い、質の高い授業を研究する。 ○「校内教員研修会」,「県外進学校視察」等を行い、難関大学進学指導やHR経営等の知識やノウハウを蓄積・継承する。	B	○「校内授業公開」では全教職員による相互授業参観に取り組み、授業力向上を図ることができた。休校期間やその後のオンラインでの授業実施により、ICTスキルがアップした。「ICTを活用した学力向上事業」で授業実践も行った。 ○「校内教員研修会」を実施し、本校のベテラン教員による長年の経験に基づく発表は、今後の指導のあり方を考える機会となった。「筑波大学附属高校等の教育研究大会」や「教育研究セミナー」,「県外進学校視察」等、感染症の影響で中止になってしまい、例年のように実施できなかった。次年度以降は、オンライン研修など、別の形態での実施方法も検討する必要がある。
	開かれた学校づくりを推進する。	○中高連携や、高高・高大連携を推進し、相互に連携・交流を深める。 ○「学校公開」や「道徳公開授業」を行い、本校の教育活動や取り組みを広く周知する。	B	○「中高連携」では、茨城大学附属中への出前授業が感染症の影響で実施できず、海外研修での学びを地域の学校へと伝えることができなかった。「高大連携」に関しては、高校生講座が実施されなかったため参加できなかった。次年度以降、感染対策をしながら実施できることを検討していきたい。 ○学校公開は、「道徳」や「道徳プラス」の授業を含めて、午後の3時限を公開授業し、学習活動での高い評価を得ることができた。他の行事でも公開できるものを検討していきたい。
	充実した教育活動により、未来を担う人材を育成する。	○「総合的な探究の時間」を通して進路意識と探究心を刺激し、自らの将来像を考えさせる。 ○「道徳」「道徳プラス」を通して、道徳的判断力や道徳的实践意欲・態度を育成する。 ○『学習のしおり(シラバス)』,『課題研究優秀論文集』,『海外派遣プログラム報告書』,『紀要』,『本校独自の道徳ノート』を作成し、3年間を見通した学習の計画や1年間の教育活動の振り返りに資する。	B	○「道徳」や「道徳プラス」の授業を、「道徳ノート」を利用して効果的に実施できた。入学時に3年間を見通せるシラバスを作成することにより、長期的な計画に基づいて学習する姿勢が得られた。今後シラバスの内容に関してさらに検討していきたい。 ○「課題研究優秀論文集」「紀要」等により、1年間の教育活動を振り返り、次年度もグローバルリーダーとして活躍できる人材の育成を目指し、外部の講師の協力も充実させて充実した教育活動を継続していきたい。
生徒指導	基本的生活習慣の確立を図る。	○挨拶の励行。特に来校者に対しては、積極的に挨拶をするよう指導する。 ○校外・地域等に進んで貢献・奉仕しようとする意識を持たせる。 ○規範意識を高め、水戸一高生として誇りの持てる行動をするよう指導する。	B	○挨拶については、アンケートの結果、全校生徒の85.6%の生徒がきちんとできていると答えているが、学年によっては77.2%と低い値となっている。挨拶のできる生徒が全体で90%を超えるように指導していきたい。
	学校生活の安全を図る。	○思いやりのある豊かな人間性を養い、人間関係を円滑にし、水戸一高生としての自覚と責任ある行動をとるよう指導する。 ○各学年・保健厚生部・養護教諭との連携を密に、生徒の状況を正確に把握し、生徒の心身の健全な育成を目指す。 ○インターネット依存症防止のために、スマートフォン等の適切な使用法を指導する。 ○インターネット上で個人やグループに対する誹謗中傷や、SNSでのいじめ、仲間はずれ、個人攻撃などをしないよう指導する。	B	○アンケートの結果、水戸一高生として自覚と責任のある行動がとれる社会的にしっかりしている生徒は依然多い。 ○学校生活を送る上での安全対策に対しては、非常に厳しい結果となっている。防犯カメラ・セキュリティーを含めて、生徒が安心して学校生活を送れるように、対策に取り組んでいきたい。
	交通安全の意識を向上させる。	○自転車は車道の左側通行など、交通法規の遵守を徹底させる。 ○自転車による交通事故ゼロを目指す。通信機器等を操作しながら、またはイヤホンを使用しながら運転をしないなど、安全な自転車の乗り方を指導する。	B	○1月20日現在で自転車事故の報告が7件報告されている。次年度は、事故を起こした生徒一人一人に対して生徒指導部でも本人と個別面談をして、状況確認ならびに事後指導を検討していきたい。 ○自転車の危険な乗り方について、どのように指導していくか。
	いじめ問題に適切に対応する。	○いじめの未然防止に努め、いじめのない学校を目指す。 ○いじめを早期発見するために、各部署との連携を図り、職員全体で情報を共有する。 ○教職員対象の校内研修を実施し、いじめに対する意識を高める。 ○インターネットの適切な利用とともに、インターネット上のいじめが起こらないように指導する。	A	○毎月実施している、いじめアンケート(含む被害調査)の実施方法について検討していきたい。現在はA4用紙に印刷して回答させているが、アンケートの印刷、内容確認から用紙の廃棄まで非常に大変な作業となっている。QRコードでの回答を検討したい。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題	
渉外	学校行事を各分掌、該当学年と連携して円滑に実施する。	○入学式・卒業式を、関係する学年や各分掌と連携、協力して円滑に実施していく。 ○学校内外の状況変化に対応した各行事の企画・運営について研究を進める。	A	A 新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、入学式・卒業式とも従来の形式を変更することになったが、無事に実施することができた。今後も学校内外の状況の変化に対応した儀式の実施を検討していきたい。	
	奨学会関係の事業を、各分掌、各学年と連携して円滑に進める。また、同窓会との関係を深め、諸事業に協力する。	○奨学会との連携・連絡を適切に行い、奨学会総会並びに奨学会役員会の企画・運営を、各分掌、各学年と協力して円滑に進めていく。 ○保護者や学年への連絡・報告を適切に行い、様々な学校行事が円滑に進められるように内容を工夫改善していく。 ○同窓会との連携・連絡を適切に行い、諸事業に協力していく。 ○高等学校PTA連合会関連行事を用いて、本校教育活動の発信に努めていく。 ○併設中学校の保護者組織について検討を進める。 ○学校内外の状況変化に対応した各行事の企画・運営について研究を進める。	B		新型コロナウイルス感染拡大によって、奨学会総会は実施できなかったが、書面決済を円滑に行うことができた。県高P連関係の行事がほぼ中止となる中で実施された水戸地区高P連研修会では、奨学会のこれまでの活動を集約した発表を行い、他校からも好評をいただいた。附属中学校の保護者組織を整備することができた。同窓会である知道会との連携を保って知道会入会等を進めることができた。次年度も水戸地区や県の高P連との連携を深めていきたい。知道会とも連絡を密に取っていききたい。また附属中学校開校後、保護者組織を円滑に組織していきたい。
	奨学金関係事務を適正に実施する。	○奨学金関係の事務および奨学生の選考に関する事項等を、遅滞なく適切に行っていく。	A		奨学金については、生徒の希望に添った奨学金制度を紹介し遺漏なく手続きをすることができた。次年度も奨学金制度の普及と、奨学生の選考を適切に行っていく。
情報	PCや情報機器の整備・管理・運用を適切に行う。	○県の規則に基づいてPC及び関連機器の適切な配備をおこなう。 ○高等学校校務支援システムの移行がスムーズに行えるように計画・立案し遂行する。 ○PCや電子黒板のメンテナンスを適切におこなう。	B	B 共有ドライブや校務支援システムの切り替え設定は無事に終了した。一方、校内PCの中で、耐用年数を迎えつつある機器が存在するので、引き続き更新の必要がある。 昨年に引き続き、内容の充実を努めた。保護者の要望の中に、生徒の活動の様子がより分かりやすいHPを求める声があるので、情報伝達について工夫していく必要がある。 特別活動部のオンライン全校集会や、進路指導部・研究構想部のオンライン講話・面接などにおいて連携を図ることができた。個人情報の管理やウイルス対策等の注意喚起・情報提供はよりタイムリーにおこなっていききたい。 紙ベース中心からGoogleFormsを用いた方法に切り替え、処理速度は上がった。質問項目については引き続き検討していく必要がある。	
	HPの充実を図る。	○教員間の連携を密にし、情報伝達および広報が迅速かつ正確に行えるようにする。 ○HPのレイアウト及び項目などの更新を進め、見やすく効果的なものになるように努める。	B		
	情報の処理等についての支援活動を行う。	○他分掌、学年との連携を強化し、情報部として可能な支援の強化に努める。 ○個人情報の管理やウイルス対策等の注意喚起・情報提供をおこなう。	B		
	学校評価アンケートを適切に実施する。	○質問項目を検討し、アンケートの正確な処理をおこなう。	B		
図書	自ら課題を発見し学ぶ生徒を支援する図書館として一層の充実を目指す。	○図書管理・検索システムの不断の管理・保守により、安定的運用を図る。 ○教科からの授業内容に関連する推薦図書情報を得て、レファレンス・展示等をおこない、貸出し利用に繋げる。 ○選書について、多様な興味関心をもつ生徒にできるだけ近い、中学生向け選書にも一定の配慮をする。	B	B ○図書館管理・検索システムのアップデート情報に留意し必要なときは導入を検討していく。 ○授業・教科担当者からの図書推薦を更に充実させる方法を検討する。 ○併設中学校が必要とする書籍について選書を進め計画的な購入に結びつける。 ○第1・2年次の総合的な探求の時間(課題学習)での利用をはじめとして、生徒一人ひとりの学習で一層の図書利用が進むように館内展示・図書紹介を進める。 ○本年度見送られた読書会、ビブリオバトル等のイベントを感染状況に留意しながら開催出来る準備をし、読書体験の促進や共有を進める。 ○読書感想文コンクールに出品できるよう引き続き教科と連携し指導を行う。令和2年度は県読書感想文コンクール県議会議長賞を受賞した。 ○校外生徒委員会研修会(全県、水戸地区)や学苑祭への文化団体参加、定期刊行物(冊子、新聞)の編集作業などを、感染状況に留意しつつ生徒が主体的に活動可能になるようできるだけ計画していく。 ○年報22号の発刊について、情報収集を継続し着実に編集作業を行い制作を進める。 ○図書館報、2誌の制作を計画的に行い発行する。	
	読書体験ができる機会を設け啓発し、読書に親しむ生徒の増加を図る。	○授業における図書館の積極的な利用を進める。 ○図書館の利用者数、貸出し数増加を図るため分かりやすいPOP展示、新収蔵図書の紹介を行う。 ○読書会等を実施し読書体験の共有・啓発運動を行う。 ○各種読書コンクールへの積極的応募を勧め、読書への興味をさらに高める。	B		
	生徒委員会活動のさらなる活発化を目指す。	○毎日のカウンター当番を活動の基盤としながら、生徒委員の学苑祭・読書会運営、機関誌編集、校外における研修会参加等を積極的に支援し、リーダーの育成について配慮する。	B		
	機関誌を着実に発行し、本校の歩みを正しく記録する。	○年報の発行に向けて、編集方針検討や資料収集作業を着実に進行。 ○図書館報2誌の制作を計画的に行い発刊する。	B		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
保健厚生	学習環境の整備に努める。	<ul style="list-style-type: none"> ○校舎内外の美化活動の取り組みを推進する。また、ゴミの分別を行うよう指導する。 ○教室内・各教科準備室等の空気・照度検査、飲料水の水質検査、ダニの検査を実施する。 ○モップ交換や普通教室のカーテンのクリーニング、ワックスがけを行う。 ○施設・設備の安全点検を行い、環境の安全の確保を図る。 ○中高一貫に伴い、カウンセリング室の整備を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○コロナ禍でワックスがけを行うことができなかったため、来年度は工夫して行うことが必要になると思われる。 ○弁当販売の場所の清潔を維持する工夫が必要。 ○新設教室設置の学校環境衛生検査を学校薬剤師に実施していただく必要がある。 ○カウンセリング室の整備がまだ決定していないので早急に対処しなければならない。 ○中学校保健室の整備をしなければならない。
	心身ともに健康的な生活習慣の確立に努める。	<ul style="list-style-type: none"> ○健康診断や保健室利用時などの機会をとらえて、保健指導を行う。 ○事故・怪我等がないように、注意を払いながら生活するよう指導する。 ○感染症に対する予防を徹底するよう指導する。 ○各学年、生徒指導部、スクールカウンセラーとの連携を密にして、生徒の心身の健全な育成を目指す。 ○健康に関する情報提供のための「保健だより」を、毎月1回発行する。 ○災害時における避難訓練を通して、校内の状況と避難経路を確認し、防災に対する意識を高めるよう指導する。また、休日や校外においても緊急事態に対応できるよう意識づけを図る。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○コロナ禍のため、避難訓練が一部できなかったが、避難経路を掲示で周知することができた。 ○必要物品を揃えつつ、各発達段階に合った保健指導を行う。
1学年	基本的生活習慣の養成を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○挨拶、時間厳守の大切さを各ホームルーム、学年集会などで話し、実践できるようにしていく。 ○傾聴力を養成し、人の話をしっかり聴き、落ち着いて行動をすることができるようにしていく。 ○定期的に生徒面談を実施することにより、個別の生徒への対応を丁寧にしていく。 	A	多くの生徒が規則正しい生活習慣で落ち着いて学校生活を過ごすことができている。挨拶、時間厳守での行動も実践できており、次年度以降も指導を継続していく。授業、集会、発表の場では他者の話を真剣に聴く姿勢が見られる。次年度は学校生活や勉強面で様々な悩みを抱える生徒が出てくると考えられる。今年度と同様に必要に応じて面談をすることで生徒を支えていきたい。
	自主的に学習に取り組み、自ら課題を見つけ、解決していく習慣の養成を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○各種進路行事に参加をさせることで進路意識を高めさせる。 ○各教科主催の講演会、数学オリンピック、科学の甲子園に積極的に参加をさせ、知的好奇心を高める。 ○週末課題、長期休業時の課題を用意し、家庭学習時間を確保させる。 	B	A 各種進路行事、講演会などにより、学習内容への興味関心は高まった。また、数学オリンピック、科学の甲子園に積極的に参加する生徒の姿が見られた。課題などの取り組み状況も良好である。生徒の成長の余地は大きいので次年度以降の指導にも力を入れていく。
	特別活動への積極的参加により、強い精神力や協調性を育む。	<ul style="list-style-type: none"> ○学校行事、部活動、委員会活動への積極的参加を促す。 ○各種大会へ積極的参加を促す。 	A	委員会活動や部活動には多くの生徒が積極的に参加している。次年度は中心学年となるので、参加をするだけでなく、責任感を持って取り組ませていきたい。
2学年	基本的生活習慣の養成を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○状況・相手に応じた挨拶の励行。 ○忙しさのなかでの時間管理能力を高めさせる。 ○規範意識を生活の中で保つ強さを持たせる。 	B	習慣づけとして機械的な挨拶でなく、相手の状況に即した対応を求めてきた。大半の生徒は期待したレベルに届きつつあるが、未だ個人差が大きいと感じる。また、規範意識については登校時間や遅刻などの面でルーズになっている生徒がおり、その原因が時間管理できていないことであり、指導を継続していく必要を感じる。
	自主自律的学習習慣の養成を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○知的好奇心を高め、文章や発表の形で具現化させる。 ○学習内容全体を把握した上でバランスの良い学習活動を行わせる。 ○家庭での予習復習を定着させる。 	B	B コロナウイルスの影響で活動は制限されたが、生徒それぞれに課題研究、道徳プラス等の特別活動を通じて教科以外の知力養成について努力していた。夏のLHRではグループごとにテーマを設けて大学研究の発表を行い、進学意識を高めることができた。
	特別活動の安定的な運営実現を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○学校行事、部活動、委員会活動への参加を通して中高一貫化へ備えさせる。 ○部活動の各種大会については安全を確保したうえで参加させる。 	B	中高一貫化については生徒会を中心に部活動の調整等について学年集会で話し合うなどの活動を行い、来年度に向けて現在も協議が継続中である。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
3 学 年	進路実現にむけ主体的な学習の実践を図る。	○進路情報を精査し、高い進路目標を設定するための指導・支援。 ○授業を中心とした主体的かつ計画的な学習の促進。 ○進路実現にむけた意識醸成のための指導・支援。	B	共通テスト元年、あるいはコロナ感染状況による休校期間の指導等、例年とは違う指導が必要となった学年であった。しかし、継続的な個別面談の実施や生徒の進路志望動向を詳細に掌握し個々の進路指導を行うことにより、受験学年として大学入試に向かう雰囲気は比較的早期に醸成され、年間を通して生徒の進路意識は高く維持された。一方、生徒を取り巻く進路環境は年々多様化しており、生徒はもとより保護者とも情報を共有し、変化に即した進路指導がさらに求められる。
	親和寛容の精神を涵養し、精神的自律を図る。	○自らの在り方・生き方に対する指導・支援。 ○個性や才能を伸ばし社会貢献しようとする進取の精神の獲得にむけた指導・支援。 ○社会の一員としての教養と品格を獲得するための指導・支援。	B	B コロナ感染状況により、学校行事、部活動、委員会活動等、学校生活全般に関しては、例年通り行えたものが少なかった。生徒たちはその中でも、水戸一高の伝統を継承する意図のもと主体的かつ意欲的に取り組む姿勢が見られ、その経験が多くの生徒にとってプラスになると確信している。一方で、生徒が社会の一員として自身の在り方・生き方を模索する契機となるよう、生徒個々の個性や才能の伸長に繋がるよう、特別活動の在り方については今後さらに検証していく必要がある。
	規範意識および基本的な生活習慣の確立を図る。	○実社会に通用する普遍的な規範意識確立のための支援。 ○学校生活における時間厳守、挨拶・清掃活動の励行促進。	B	学校生活において生徒は平素より時間の厳守、挨拶、清掃活動を励行しており、基本的な生活習慣が確立していることを窺わせた。また、入学当初は他者との意思疎通に苦手意識を持つ生徒も多く見られたが、教員や上級生・級友等の多様な他者との関わりの中で相互に認め合い、落ち着きある人的環境が醸成された。生徒は概して規範意識が高く遵法性に富んでおり、将来実社会において、さらに多様な価値観に晒された際にも変わらぬ姿勢で臨むことが期待される。

※評価基準 A:十分達成できている B:達成できている C:概ね達成できている D:不十分である E:できていない